



北海道における明治女医史 補稿[Ⅱ]

—女医 三野嘉寿井と早坂チカ—

札幌市医師会 宮下舜一

[Ⅰ] 女医三野嘉寿井 (つづき)

(三野夫妻の来道と杉田長官の辞任)

嘉寿井の夫三野昌平が、新任長官杉田定一の招きにより、はるばる石川県田鶴浜から北海道庁の役人として来道する事情は前号でも少し触れた。党人派出身では初めての長官杉田は、北海道の官僚支配的政策の転換を目論み、自由民権運動の同志であった三野の行動力と石川県議時代の活躍、手腕に着目して、杉田道政のブレーンの役割を期待したのではなかろうか。

杉田の要請に応じた三野昌平が嘉寿井夫人を伴って札幌の土を踏むのは、杉田長官が本格的に本道に腰を据えた9月以降、札幌ではすでに秋の気配も漂う頃であったと思われる。

札幌着任後、幾許もなくして起った中央の政変劇の余波から、頼みとする杉田長官の突然の更迭は、三野夫妻には全く予想外の出来事であった。板垣内相の辞任と行動を共にして、在任わずか4ヵ月目にして7代目北海道長官杉田定一は何ら足跡を残すことなく北海道を去った。

明治31年6月22日；進歩党(党首大隈重信)自由党(板垣退助)合同し憲政党を組織。

同年6月30日；初めての政党内閣樹立。第一次大隈内閣。隈板内閣とも呼ばれる(首班兼外相大隈、内相板垣)。

同年7月16日；板垣内相の推薦人事により衆議院議員杉田定一が北海道長官に任命される。8月総選挙、与党大勝。

同年10月29日；憲政党内閣の派閥対立激化、板垣内相等同自由党系の閣僚総辞職。同月31日大隈内閣崩壊。

同年11月8日；第二次山県内閣成立。12日園田

安賢北海道長官就任。杉田長官退任。

明治32年の年が明け、昌平氏は薬剤師の学識を活かし道庁警察部衛生課技手として北海道の大地に腰を据える決心を固める。時に昌平44歳、嘉寿井夫人40歳、人生の折り返し点での新しい歩みが始まる。その後10年間、昌平氏は道衛生技官として保健・防疫・医薬各部門にわたり衛生行政の中心となり活躍している。特に衛生委員・防疫官として実践面の活動は全道各地に及ぶ。

明治41年、官職を退いた後札幌薬剤師会会長に挙げられ、次いで北海道薬剤師会の初代会長に就任している。明治44年には推されて区会議員に当選、晩年は札幌区会議員として活躍、名士録に名を残す。

筆者が女医三野嘉寿井の名を目にしたのは、ごく最近のことである。医師会のある会議で、たまたま集合時間を間違え会議室で待機中、図書棚からなんとなく手にした「札幌薬剤師会史」。パラパラと頁をめくって目に止まったのが三野昌平のプロフィール『・・昌平氏の活躍は夫人の内助の功が大きい、嘉寿井夫人は北海道では荻野吟子に次ぐ女医で・・』とある。更に三野御夫妻の曾孫に当たるとして、現在札幌市で内科開業の三野昭三ドクターの名も見える。

(札幌での開業と医療活動)

前号において、明治32年当時、嘉寿井女史と立場を同じくする従来開業免許の女医が約33名実在することを述べたが、その医療実働を示す記録は見出し難く、存在そのものがベールに包まれていた。今回、嘉寿井女史の札幌での医院開業の実証、受診者の証言などが確認されたことから、荻野吟子以前の公認女医の実態がさらに全国各地で解明されることが期待される。

(1)三野医院開業を実証する広告文

明治32年6月20日発刊の「札幌案内」(廣目屋発行)は、当時の札幌の現況をつぶさに伝える稀覯本だが、幸い昭和42年に復刻されて貴重な情報を手軽に知ることができる。これによると当時区内の医師は31名(歯科2名)、(公・私)病院7、開業医院約12(勤務・開業区別不明医師あり)であり、ここには女医三野の名はまだ出ていないが、同誌の広告欄に(図1)の如く三野医院の紹介が掲載されている。幾度も目にしていたが、院主名に三野とあるだけで女医の経営とは気がつかなかったのである。さて、三野整骨医院の開院時期はいつであろうか。「札幌案内」発刊の6月にはすでに医院が稼動していたことは明らかであり、同年の3月に札幌病院を退職して、5月1日(新聞から確認)に病院を開設した元札幌病院医長荒井保吉医師の動静を参考に推定すると、嘉寿井女史の医院開設は、荒井氏の開院の前で札幌病院退職よりは後である。つまり32年4月頃、区内南3条西8丁目1番地に三野嘉寿井の「整骨医院」が誕生した。

(2)整骨医院開設の動機について

来札約半年後、比較的短期間に医院開設を決意する経緯については何ら知るところはないが、明

(図1) 整骨医院の広告文



明治32年「札幌案内」より転載

治32年2月の雪中藻岩山で起きた死者も出る大惨事と無関係ではないと思われる。

◎藻岩山雪中登山の大惨事(明治32年2月20日)
(第七師団所属)月寒独立歩兵大隊・工兵中隊の兵員(歩兵第25聯隊の編成は同年11月)約600名の冬季訓練に随従した札幌中学校生徒400名、師範学校生徒110名及び付き添い教師約20名を含む総勢一千餘名。同日午前10時藻岩山登山口に到達して登攀開始。手櫓隊の訓練に時間を要し、全員の登頂完了は午後2時を過ぎた。昼食・記念撮影、軍鼓笛隊の吹奏等、一行は冬山登頂気分を満喫、下山は午後4時を過ぎる。夕ぐれの気配もただよう中、道を東にとり間道北向きの急峻な広く深い急斜面に至る。先導隊に続き軍隊・生徒入り混じって一勢に斜面を滑り降りる。処々に表層なだれが発生怪我人も出たため、「下りるな、とどまれ」と谷底からの叫びも上には届かない。非常ラッパが鳴り響くと、進軍ラッパと思い違えたのか、更に斜面に向かって突進する生徒集団ありと見る間に大規模な雪崩が発生。多数の生徒がこれに巻き込まれ、数名は約100メートル下に突出した岩角で雪塊と共に空中高く跳ね上げられ、札幌中学3年生徒1名胸部打撲で即死、同中学生徒3名及び師範学校校長等が重症、他にも負傷者数十人に及ぶ惨事となる。軍医、救護兵の活動は勿論であるが、立木と外套を利用、担架を急造しての重症者搬送は困難を極めた。また骨折負傷も多く当木(副木)を作り手当をしたと随行記者の報道記事に見える。

山鼻西屯田兵村の協力を得て、負傷者は兵村家屋に運ばれ、急報で駆けつけた医師により応急手当を受けた後、次々と区内の各病院に馬櫓で搬送される状況は、嘉寿井女史も自宅近くでつぶさに目撃したに違いない。一度に多数の負傷者の発生で、区内の外科病医院は暫く多忙を極めたと思われるが、当時整骨科を標榜する病医院は区内に一つもなく、接骨師の存在も確認できない^(註1)。整骨治療を必要とする負傷者が、適切な治療を受けることなく路頭に迷う現実を目の当たりにした嘉寿井女史は、多年の経験を積んだ専門医師として、札幌での整骨医療に献身すべき使命感にかられたのではなかろうか、また夫昌平氏の勧めもあったのであろう。その後女医三野嘉寿井は、明治39年に至るまで、区内唯一の整骨科専門医として地域

医療に奮闘することになる^(註2)。

[注1];接骨師は按摩・鍼灸法に準じ、鑑札を付与し府県単位で取り締まりが行なわれていたが公認の業種ではなかった。主として柔道家の伝統整復技術による接骨営業だったと思われる。三野女史の開業当時、札幌には3人の柔道家がいたが、接骨師兼業については記録がない。接骨師が今日の単独柔道整復師法で公認に至る道程は遠く長い、その歴史の変遷は「日整六十年史」に詳しい。

[注2];明治39年、北1条西3丁目に開業した「札幌整骨病院」は、中村百合之允医師の経営である。収容患者定員12(病室7)。中村医師は愛知県出身、安政元年生れ、(試験及第明治21年)。

明治期に開院した整骨科専門病院が小樽にもある。明治43年、小樽稲穂町西5丁目に武田重太郎医師により、矯正科・光線科「東洋整骨科病院」が開設している。

(3)女医三野嘉寿井の知名度

「北海道医事通覧」(大正2年2月刊)は、本道の明治医療史を語る稀本であるが、函館の医師を(やや宣伝的に)紹介した中に次のような見逃せない記録がある。

『本道には女医少なし、唯札幌に三野嘉寿井^{ママ}女史あれど、業を養嗣子倫次郎氏に譲りて殆ど(最近は)廃業に近く、今や(函館の早坂)女史独り本道に其の令名をほしいままにす……』

嘉寿井女史が「整骨医院」を廃院とし、養子倫次郎氏を院長とする「三野病院」を新設するのは、明治39年であるが、大正に至るまで札幌の女医三野嘉寿井の名声は函館にもおよび、その知名度は明治27年から12年間在道した荻野吟子を凌ぐかのように思われる。嘉寿井女史の札幌での医療活動を示す証左であろう。

(4)ある老人の証言

嘉寿井女史の曾孫昭三医師が、昭和27年頃北大第3内科から足寄町立病院に出張された時のことである。たまたま診療に訪れた82、3才の老人から、昔(37、8才、明治41年頃)札幌近郊の冬山造材作業に従事中、右大腿部の骨折を起こして札幌三野病院に運ばれ治療を受けたと言う話を聞く。さらに治療の担当医は年配の女の先生だったと言う。あまりの偶然に驚きながら40数年前に曾

祖母が治療した老人の骨折痕をしみじみ見つめた。これは三野昭三先生から直接お聞きした貴重な生きた証言である。

(三野病院とその後)

三野昌平夫妻は子に恵まれなかった。養子となり三野医院を継承した倫次郎氏は、明治8年2月三野夫妻と同郷の石川県鹿島郡田鶴浜村、旧士族平盛直家の二男として生まれる。長じて医師を目指して勉学していた形跡があるが詳細は不明である。三野家に入籍した時期も分からないが、初めて札幌を訪れたという明治36年の前後であろうと推定される。その頃28才の倫次郎氏はすでに妻帯して長男外良雄が出生していた。いくばくもなく上京した倫次郎氏は、養家の要望に答えるべく、医師資格試験をめざして勉学の年月を重ねた。前期試験を経て明治39年の春、後期医術開業試験にも合格して晴れて医師となった倫次郎氏はさらに東京に留まり内・外科の实地臨床を積んだ。後継者を得た嘉寿井女史は整骨医院を閉じ、新たに南7条東1丁目に倫次郎氏を院主として「三野病院」を設立する。同年の秋研修を終えた倫次郎医師は、嘉寿井女史の建てた病室10、病床数21の堂々たる新病院の主催者として活動を始める。標榜科目は「内外科・整骨科」で、48才の嘉寿井先生も以後この病院で整骨医療を担当したことが分かる。また明治41年設立の札幌区医師会名簿では、三野病院勤務として三野嘉寿井の名が大正8年まで継続している。倫次郎氏の経営する三野病院は、以後大正・昭和初期の札幌で有数な私立病院として発展し、大正8年から2～3年の間、後に市内で開業する鳥海理一医師が医員として勤務している。倫次郎院長が札幌区医師会の役員・小学校校医などに活躍したことも医師会記録に残る。

三野病院の薬局も手伝い、晩年は区議員として活躍した養父昌平氏が、大正5年12月死去。また、田鶴浜で父の医業を継ぎ、札幌での整骨医院経営から三野病院を設立、病院の発展を見届けた女医三野嘉寿井女史は、大正9年3月、夫の後を追うように悔なき生涯を終えた。夫妻ともに享年62才である。

倫次郎氏に男子3人あり、長男外良雄氏は北大

医学部出身（昭和4年卒）の医師。三男更一郎氏（北大医専一期生）も医師であるが海軍軍医として従軍中、惜しくも昭和19年11月レイテ沖海戦で散華された。

これより先、医家三野家四代目を継ぐ外良雄氏が母校第2内科で研究中の昭和6年、夫君倫次郎院長が急逝した。しかし外良雄氏は病院を継承することなく札幌を離れ、その後道内各地の病院長、生命保険医、など勤務医としての生活が長い。従って嘉寿井女史の設立した三野病院は倫次郎氏の代で終わったことになる。外良雄医師は晩年赤平市で医院を開設し、赤平市医師会設立（昭和43年）の際には、初代会長に就任された（昭和52年札幌市で病死）。外良雄氏の長男昭三先生が、昭和42年以来、豊平区平岸で現内科三野医院を経営、医家5代目として今日に至っている。

〔Ⅱ〕函館最初の女医 早坂チカ

さきに間宮八重の記述の中で、早坂チカの函館開業の時期を間宮と同じ明治42年と書いた。これは同42年12月発行の医籍録に東京と北海道の双方に記録が見られることから単純に42年の来道を考えたが、明治41年中に函館で開業した可能性が高いことが判明した。従って北海道3番目の女医は早坂チカで、間宮八重は4番目の女医となる。

（生い立ちと女医になるまで）

早坂チカ（千賀・千賀子とも書かれる）は、明治12年11月函館生まれの道産子である。父は早坂兵三郎と称し旧仙台藩士で明治初年函館に渡り商業に従事していたが、詳細については資料を欠く。士族商家の長女チカは、函館女子小学校を卒えると家を離れ、仙台の松操女学校に進学した。女学校卒業後、故郷函館に戻り小学校教員となり4年間が過ぎる。明治34年22才の春、向学心に燃えるチカ女史が、断然教鞭を捨てて医学の道を志して上京する動機は不明だが、その頃、キリスト教徒として、また女医のパイオニアとして瀬棚町で奮闘する荻野吟子の噂は函館にも及んでいたであろう。吟子に対する尊敬と憧れの思いが、若いチカ女史の心を揺さぶったと考えても不自然ではない。

女性が医師を目指すには医術開業試験（前期・

後期）の合格以外に方法はない時代である。上京の目的はまず医術試験の予備校的存在である「済生学舎」への入学である。しかしチカ女史の上京した明治34年、「済生学舎」には大きな異変がおきていた。前年の秋に女子の入学停止が決まり、同年3月には学舎在学中の前期生30名、後期生14名の女子学生全員に退学が命ぜられた。この女子学生拒絶の理由とされた「風紀上の問題」は口実であって、済生学舎は単科医科大学設立を目指す意図から昇格には不利な女子学生の一掃を図ったのである。予想外の東京での第一歩を踏んだチカ女史は、吉岡弥生が前年12月、自院（資生医院）の一室を臨時教場として開設した「東京女医学校」にとりあえず入学するが、幾許もなく済生学舎から締め出された女子学生のために開設された「女子医学研修所」に転じている。この研修所は36年「済生学舎」の閉鎖により生じた男子学生救済の必要から開設した「同窓医学講習会」と合併して37年4月「私立東京医学校」となる。

以上のような過渡期における不利な条件の下で医術開業試験に向けて懸命な努力を傾注した早坂チカは、故郷を出て5年目の春（明治39年）後期試験をクリアー、念願の医師免許を手にした。

（医師修業と函館開業）

医師免許を手にしても、当時の医界では女医の



函館区恵比須町
女医 早坂千賀子

研修を受け入れる病院は非常に限られ、新しい技術習得の場を得ることは困難であった。早坂チカは、試験及第後も東京に留まり、「婦人共立育児会」に所属して、会を主導する東京帝大医科初代小児科学教授弘田 長博士の指導の下に2年余にわたり小児科専門医として研鑽を積む幸運に恵まれた。

郷里函館に錦を飾って、区内恵比須町に医院を開設したのは明治41年の秋と推定される。本道3番目、函館最初の女医である。新進の小児科専門

医として区内で大いに名声を博したと思われるが、明治45年には再び上京して婦人科を研究し、以来「小児科・婦人科」を標榜して業務の発展を図ったとする記録がある。大正2年以後、早坂医院の消息を伝える情報が途絶えるのは気がかりだが、「函館市医師会史」の物故者名簿には、『早坂チカ大正10年8月17日死亡、遺族不明』と記録が残る。享年42才、優秀な人材の早い死が惜しまれる。(終わり)

お知らせ

“Floor Seminar”開催のご案内

札幌医科大学医学部—Floor Seminar—を開催いたします。
札幌医大の若い研究者が行っている最先端の研究を分かりやすく解説します。多くの先生のご来聴をお待ちしています。

講演日	演者	講演タイトル
10月6日	坂本 淳(薬理学)	NAD依存性ヒストン脱アセチル化酵素SIR2の分子解析
11月10日	千葉 英樹(第2病理学)	コンディショナルシステムで探る生体バリアの形成と制御
12月8日	深尾 充宏(第1生理学)	血管内皮依存性過分極反応の解明とその生理的役割内皮由来過分極因子(EDHF)は存在するのか?
平成16年 1月19日	山陰 道明(麻醉科)	気道平滑筋収縮弛緩機構に及ぼす周術期環境変化の影響
2月9日	田中 裕士(第3内科)	気道アレルギー疾患における新規治療方法の確立を目指して
3月8日	豊田 実(第1内科)	エピジェネティクスを利用したがんの診断と治療

問い合わせ先：〒060-8556 札幌市中央区南1条西17丁目

札幌医科大学附属がん研究所分子病理病態学部門 三高俊広

電話：011-611-2111 内線2390 E-mail：tmitaka@sapmed.ac.jp